九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中学校における逸脱行動とその背景② : 現代中学生の「規則観」「対教師観」

吉本, 圭一
東京大学教育社会学研究室

https://hdl.handle.net/2324/18522

出版情報：教育技術 : 中学教育. 27 (9), pp.46-52, 1982-10-01. 小学館
バージョン：
権利関係：

生徒理解資料

中学校における逸脱行動とその背景②

―現代中学生の「規則観」「対教師観」―

中学校が荒れているのは、特定のツッパリ生徒だけの問題ではない。実態調査をもとに、現代中学生の行動の背景をさぐるシリーズ企画…

東京大学教育社会学研究室
吉本　圭一

中学校ではなぜ逸脱行動が起こるのか。

ここでは中学生の逸脱行動を生み出す背景として、校則観と教師＝生徒関係に焦点をあてて、学校のどこが問題なのか、そして学校に何ができるのかを考えてみたい。逸脱というのは、逸脱者個人の問題であると同時に、すぐれて社会の病理の問題でもある。そして個人と全体社会との接点にあるのが、学校などの諸社会集団なのである。

前号でみたように、逸脱行動が生み出される背景には生徒集団全体の文化と学校文化の衝突がある。本号では、なぜ両者が衝突するのか、その原因を学校文化の中にさぐってみたい。なおデータは、前号と同じく東京大学教育社会学研究室（研究代表者・天野郁夫助教授）が都下の一公立中学校の生徒を対象に実施した意識調査の結果である。（注）

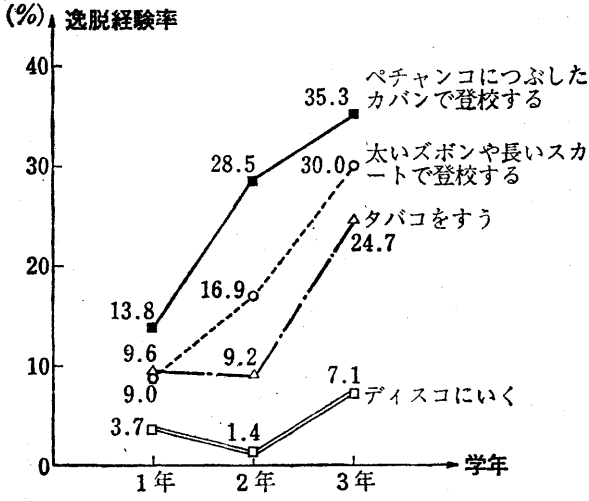
（注）調査時期＝一九八一年十二月。有効回収数五六五（内訳＝男子二七八、女子二八七。一年一八八、二年二〇七、三年一七〇）。

1　学年とともに増える逸脱行動

中学校の教育効果を考えてみよう。教育を多く与えれ

ば逸脱行動に走る生徒が少なくなるのだろうか。調査結果からみるとむしろ逆である。法律にふれたり校則に違反する逸脱行動十一種類について、「この一年間」の経験の有無をきいてみると、行動の種類によって逸脱経験者の比率は違うが、ほとんどの行動で学年進行とともにその比率が増加しているのである。とくに二年生から三年生にかけて急増している。図1はそれをみたものだが、「太いズボンや長いスカートで登校」した生徒を例にとると、一年生では九%だが、二年生で一七%、三年生になると三〇%にまで経験者がふえる。また「タバコをすう」生徒も、一、二年生では一〇%以下だが、三年では二五%が経験している。

図1 次のようなことをしたことがありますか。「この1年間にしたことがある生徒の比率」



学年の上昇とともに逸脱経験がふえるのは、ひとつには中学生が反抗期をむかえるためと考えられる。成長の途上で、時には大人の定義では「逸脱」となるような行動も積極的に試してみる。だが、それは、いわば「思春期のハシカ」であって、必ずしも「非行の前兆」とは言えないのである。調査結果をみても、「ディスコにいく」「万引きする」という法律にふれる逸脱行動の経験は、校則に違反する「ペチャンコカバンで登校」などの逸脱行動の経験と、あまり強く関連しない。「ペチャンコカバン」経験者のうち一〇%は万引きをしたことがあるが「ペチャンコカバン」の未経験者のなかでも四%に万引き経験があり、特に大きな差ではないことがわかる。

上級生の逸脱増加について、もうひとつ学校生活自体の特性を考える必要がある。学校生活が「とても楽しい」と感じている生徒は、一年で二七%、二年で二五%、三年では急減して一〇%になっており、逸脱経験の比率の動きとちょうど逆になっている。三年になって急速に学

校の楽しさが薄れていく雰囲気の中で、一部の生徒たちが逸脱行動に走るのである。

前回書いたように友人グループの有無が学校の楽しさを左右するのだが、この点では学年差はない。ではなぜ学校がつまらなくなり、逸脱がふえるのか、校則をめぐる意識にまず注目しよう。

2 校則観——「罰はうけたくない」

学年が進むにつれて逸脱行動がふえることはわかったが、中学生はそうした逸脱行動についてどう思っているのだろうか。図1でみた逸脱行動が悪いことかどうかとたずねてみた。「太いズボンや長いスカート」を「かなり悪い」ことと思う生徒は、一年で四四%、二年で三六%、三年で三〇%まで減少する。タバコでさえ、かなり悪いと思う生徒は一年で七五%いたのに、三年ではそれが五三%になる。三年生の半数に罪悪感がなく、四分の一は実際に喫煙経験をもつわけである。

罪悪感が薄れることに加えて、中学生たちは自分の判断を大切に思うようになる。調査の結果によれば、「自分で守ればよいと思うきまりだけを守ればよい」と考える生徒は、一年では二四%なのだが、三年では三四%にまで増加している。つまり、中学生は自分の判断によって行動したいと考えるようになるのだが、その判断でいえば、校則が禁止している行動だって悪くはないと思うようになる。

とすれば教師や学校のいう「逸脱行動」に彼らが向かうのは容易に理解できる。むしろ、逆に逸脱行動に走らない残りの大半の生徒のほうが不思議にみえる。なぜ逸脱への罪悪感もなく、自分の判断で行動したいと思いながら、校則を守りつづけるのだろうか。しかも調査対象校の校則というと、生徒手帳によれば、他の中学校と比べてみてより厳しい点が多いのである。

なぜ校則を守りつづけるのか、その問題を解くカギは、中学生をとりまく人間関係にある。調査結果によれば、「注意や罰をうけるのはいやだからきまりは守ろうと思う」生徒は五二%もいる。また「みんなから白い目でみられたくないから」とか、「先生から悪くみられたくないから」という生徒も、それぞれ三割いる。

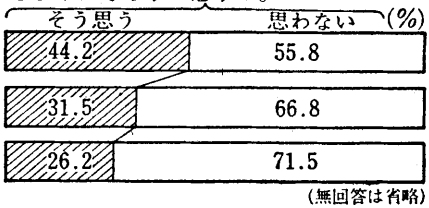
つまり校則はそれだけでも効力があるわけではなく、そこに何らかの社会的な制裁が加わることによってはじめて効力を発揮するのである。その社会的制裁として重要なのは、具体的な罰則もさることながら、教師をはじめとする他者の視線である。ただし、社会的な制裁を恐れて行動するというと、何かいやいや校則に従っている

というイメージがあるが、そうとばかりはいえないだろう。人間関係を大切にする意識という面もあるのではないだろうか。厳しい校則にもかかわらず、意外に校則への不満が少ないことにはそうした意味があるのだと思える。校則への不満の数字をあげれば、校則を「もっとゆるやかにすべきだ」と感じる生徒は、一年生で三六%だったものが、三年では二八%にまで減少するのである。

さて、他者の視線や具体的な罰則を意識することで校則を守っているのはどんな生徒だろうか。それは学校での成績のよい生徒であることがわかった。とくに教師の視線を意識するかどうかに差がある。図2をみると、成績が上位の生徒では四四%が教師を意識して規則を守るのに対して、下位の生徒では二六%にすぎない。つまり成績が下位の生徒の場合には、上位の生徒と比べて、教師の存在が逸脱の抑止力として働きにくいのである。それは、彼らと教師との交渉の取り結び方の違いを反映しているのではないだろうか。

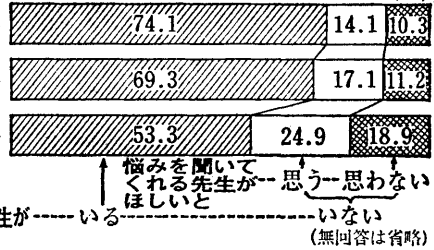
こうして、中学生の校則は、善悪の判断によってではなく、とくに教師などとの人間関係の中から生まれてくることがわかった。そこで、次に教師＝生徒関係を中心に、人間関係と逸脱との問題をみることにしよう。

図2 学校の成績と規則観



(無回答は省略)

図3 気にいった先生がいますか



(無回答は省略)

3 教師への期待と教師からの期待

教師に対して中学生はどのような感情をいだいているのだろうか。気にいった先生がいる生徒は、全体で六六%である。これは図3にあるように学年がすすむにつれて少なくなる。一年で七四%、二年で六九%、そして三年になると五三%に急減する。それはなぜだろうか。

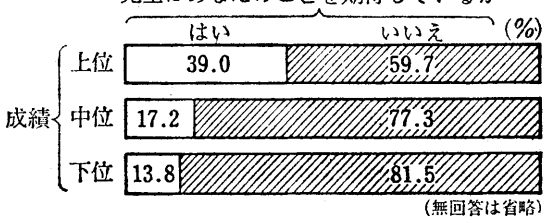
「大人」に反抗しながら自立する時期をむかえた中学生が、教師との交流を求め

なくなったためとみていいのだろうか。

そこで再び図3をみると、注目しなければならないのは、「悩みを聞いてくれる先生がほしいけれども気にいった先生はいない」という生徒が増加している点である。そうした生徒は一年では一四%にすぎないが、三年では二五%にのぼっている。現実には教師との交流がうまくゆかなくなっても、教師との交流を求める気持ちは依然として強いとみていいだろう。とくに成績の下位の生徒だけ取り出してみると、交流を求めつつもかなえられない生徒が学年進行とともに一七%から三五%まで増加する。彼らこそ教師を求めているのである。前回みたように、中学生の八六%が教師に不満を感じており、そのうち七六%の生徒が不満を行動には表さず内に秘めていた。そうした不満の一部は、ここで明らかにしたような教師＝生徒間のコミュニケーションの齟齬に原因しているのではなかろうか。

なぜ教師＝生徒関係がうまくいかなくなるのか。生徒の先生に対する評価を聞いてみると、「先生は生徒のためを思ってしかっていると思う」生徒が七八%にのぼるなど、全体としては教師の努力不足だと思っているわけではない。ところが学年による変化をみると、否定的な評価がふえる。「試験や成績のことばかり言う先生はいない」と一年の頃には三〇%の生徒が思っていたものが、三年になってみるとそうでもないことがわかってくる(九%)。また、一年生では「生徒の意見をよく聞く先生が三人以上いる」と答えるものが半数を占めるが、三年になると三二%まで減る。受験戦争の中で、教師は三年生に対しては「試験や成績」のことばかり口にするようになり、四〇名余りの悩みや意見にすべて付き合っていられなくなるのだろう。

図4 成績と教師からの期待



(無回答は省略)

こうした教師＝生徒関係には改善の余地はないのだろうか。調査結果をみるとそうではないことがわかる。重要なのは教師が何を言うかではなく、どんな態度でそうするのかにある。教師は、本当に生徒の成長に「期待」しながら彼らに接しているのだろうか。

「先生は私のことを期待している」と考えている生徒は、わずかに一九%にすぎない。それでは教師が期待

をかけているのはどんな生徒かといえば、それは、成績のよい生徒である。図4をみると、成績が上位の生徒では三九％が教師から期待されていると答えるのに対して、下位ではわずかに一四％にすぎないことが、それを裏づけている。

この教師の期待の違いこそが、前に述べた校則に対する意識を規制する重要な要因なのである。

4 期待の自己成就

中学生たちは、だれもが教師との交流を求めている。しかし、教師が中学生を見る眼はどの生徒にも同じようなのではない。成績のよい生徒にはより期待を込めた視線を投げる。学校が学業達成を主要な目標としている以上、成績のよい生徒をほめるのは当然であり、ほめられない生徒が「理不尽なえこひいき」だとして明らさまに反抗することはできない。彼らは、どこかに不当なものを感じながらも、不満を押し殺している。こうして三年にもなれば話は「成績や試験」のことばかり。教師の視線は冷たい。生徒集団の八割は教師に期待されていないと思っているのだから、同じ思いを持つ仲間は多い。そこで仲間が集まって、本質的に悪いとは思えない「スリリングな遊び」――大人のいう「逸脱行動」に向かう。

子どもと教師をつなぐ

講話資料

新教育課程のねらいを生かし、子どもと教師の心をつなぐ新講話資料。豊富な資料と例話が指導の各場面で活用できるよう工夫した配列。

「総合教育技術」11月号増刊＊10月下旬発売

A5判・本文352ページ・定価850円 小学館

こうして、教師がはじめに抱いていた否定的な期待（レッテル）が、その期待どおりに否定的な結果をうみだし現実のものになる。すなわち「期待の自己成就」のプロセスができあがる。これが、「否定的なレッテル＝逸脱」説とよばれる、教師＝生徒関係に注目した最近の逸脱の説明図式である。

では教師に何ができるのだろうか。第一には、ポジティヴな期待を多くの生徒に分け与えることだろう。親からの期待をみると、それを感じている生徒は四九％もいる。親が多面的な評価基準で子供を把握し、彼にみあった期待をしているからだろう。これを参考にできないだろうか。第二は個個の生徒だけでなく、集団としてのクラスをどう運営していくかの問題がある。逸脱とは個人の問題であると同時に、社会的な病理の問題である。生徒を囲む人間関係は教師との関係ばかりではない。クラス内の生徒相互の関係が、逸脱を防ぐために重要なのである。生徒相互に活発な交流をする状態を作り出す必要があろう。この点について、表1はクラスの特徴と逸脱行動の関係を示している。概括的にいえば、同級生の逸脱行動に無関心な生徒が多いほど、そのクラスで逸脱行動をする生徒の比率は高くなる。逆に無関心な生徒が少なければ、たとえ直接同級生の逸脱行動を阻止する生徒は少なくても、逸脱行動の比率は低くなる。これは教師の学級経営の差異を反映しているにちがいない。

期待は多すぎても少なすぎてもいけない。教師や学校に期待するにしても然りである。詳しくは次号で扱うことになるが、逸脱というのは、選抜体制など全体社会の問題と関わっている以上、どこまでを個々の学校や教師に期待すべきなのか、期待できるのか、十分に吟味する必要があろう。ただし、私たちの調査結果は、教師の力量次第で生徒の逸脱行動をかなりの程度まで防止することが可能であり、そして事実そうした例が存在することを示している。

（続く）

表1　クラスの特徴とそのクラスの逸脱経験者の割合

クラスの特徴		そのクラスでのこの1年間の逸脱経験者の比率(%)		
無関心な生徒が	逸脱をやめさせようとする生徒が	太いズボンや長いスカートで登校	たいして悪くないのに保健室にいく	そうじ当番をさぼる
多い	少ない	32.6	30.4	74.8
	多い	19.5	26.0	64.9
少ない	少ない	15.6	14.3	64.9
	多い	11.6	13.7	47.9

クラスの数は，上の段から順に4,2,2,7クラスである。

(注)「休み時間に数人の生徒が一人の生徒をいじめている」という状況下で，どんな級友が多いか，と聞いた結果にもとづいてクラスの特徴を分類した。